

# Histological and immunohistochemical prognostic factors of primary angiosarcoma

一木, 稔生

<https://hdl.handle.net/2324/7182342>

---

出版情報 : Kyushu University, 2023, 博士 (医学), 課程博士

バージョン :

権利関係 : Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (2)

(別紙様式2)

氏名	一木 稔生
論文名	Histological and immunohistochemical prognostic factors of primary angiosarcoma
論文調査委員	主査 九州大学 教授 加藤 聖子 副査 九州大学 教授 馬場 英司 副査 九州大学 教授 吉本 幸司

### 論文審査の結果の要旨

血管肉腫は様々な組織像を示す血管内皮性の悪性腫瘍である。その高い悪性度にもかかわらず、血管肉腫における組織学的な予後予測法は未だ確立されていない。本研究では、原発性血管肉腫の予後予測法を確立することを目的とした。104例の原発性血管肉腫からホルマリン固定、パラフィン包埋標本を作成した。すべての症例はH&E染色による組織学的検査に基づいて検討した。フランス国立がんセンター (FNCLCC) 組織学的グレーディングシステムは血管肉腫に適用されないため、修正FNCLCC (mFNCLCC) を試験的に確立し適用した。ERG、CD31、CD34、D2-40、HHV-8、p16、C-MYC、p53の免疫組織化学染色 (免疫染色) を実施し、c-MYC遺伝子増幅を評価するために、31例に対して蛍光in situハイブリダイゼーション (FISH) を実施した。多変量解析の結果、高齢 (70歳以上) ( $p = 0.0011$ )、血管肉腫の原発巣が皮膚以外であること ( $p = 0.0265$ )、診断時にすでに転移があること ( $p < 0.0001$ )、腫瘍径が5cm以上であること ( $p = 0.0388$ )、タキサン系化学療法をしていないこと ( $p = 0.0388$ )、強い核異型 ( $p = 0.0087$ )、管腔構造が病変の50%以上に存在 ( $p = 0.0009$ ) が独立した予後不良因子であった。管腔形成のある血管肉腫では、mFNCLCCスコアが予後不良と有意に相関していた。p16の過剰発現は、管腔形成がより少ないことと関連していた ( $p = 0.0192$ )。C-MYCの免疫染色では、FISHの結果と中等度の一致性を示した (Kappa値=0.45)。本研究により、血管肉腫の組織学的予後不良因子として、管腔形成と高い核異型度が考えられ、管腔形成を伴う血管肉腫の予後予測にmFNCLCCが有用であることが示唆された。

以上の成績はこの方面の研究の発展に重要な知見を加えた意義あるものと考えられる。本論文についての試験はまず論文の研究目的、方法、実験成績などについて説明を求め、各調査委員より専門的な観点から論文内容及びこれに関連した事項について種々質問を行ったが適切な回答を得た。

よって調査委員合議の結果、試験は合格と決定し、博士 (医学) の学位に値すると認める。